

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『日本アニメ史 手塚治虫、宮崎駿、庵野秀明、新海誠らの100年』

津堅信之 著 | 中公新書、2024年、304pp.

本書は、ほぼ百年にわたる日本のアニメ史をかなり網羅的に、しかし新書の分量で端的にまとめ上げた良書である。従来のアニメ史関連の書は、手塚治虫の『鉄腕アトム』から始まり、その後の数名のアニメーターについて詳細に論じるというのが定型であったが、もちろんそのような研究も十分意義はあるものの、かなり限定的な議論になってしまっていた。それに対し本書は、戦前のアニメや、『鉄腕アトム』以前の戦後アニメにも時代背景も絡めて解説されているので、日本でアニメーションがどのように制作・製作され始めたのかがよく理解でき、またタイトルにある4名を除けば、個々のアニメーターや制作会社などの解説は最小限に抑える代わりに、時代ごとの様々な変化・推移が多面的かつ有機的に説明されているので読んでいて飽きない。他の大衆文化との関わりにも多く言及されていることも読みやすさにつながっているだろう。

本書を読んで一番印象に残ったのは、放映当初は視聴率や評価が低かったが、再放送を通じて人気が出たり評価が上がった名作アニメがいかにも多いかであった。これはアニメが常に時代に先駆け挑戦的な試みを行っている証左なのかもしれない。

(評／『彦根論叢』編集委員／出原健一)

『詭弁社会—日本を蝕む“怪物”の正体』

山崎雅弘 著 | 祥伝社新書、2024年、209pp.

クリティカル・シンキングや議論の仕方に関する入門書は多いが、本書は政治家の発言にいかにも詭弁が多いかを論証することで論理的な思考法や認知バイアスを解説している稀有な書である。三部構成の第一部では、実際に(国会等の)公の場でなされた発言を事例として解説しているので、形式論理だけでなく、(議会制)民主主義のしくみや理念も同時に学ぶことができる。近年ニュースになった話題も多いので、多くの人にとって読みやすいだろう。第二部では、このような詭弁に慣れてしまうと、人の正しい思考を狂わせてしまい、ウィルスのように社会の様々な場面に伝播してしまっていることに警鐘を鳴らしている。テレビなどの著名な「コメンテーター」もよく用いる「わら人形論法」や「二分法の誤謬」などもここで解説されているが、このような詭弁がメディアで無批判に放映される現状は問題であろう。そして、第三部では戦前の日本を取り上げ、当時の政府の詭弁が戦争をもたらしてしまったことを歴史的事実に基づき論じている。同じことが繰り返されないように我々は政府やメディアからの情報に向き合うべきかを考えさせてくれる一冊である。

(評／『彦根論叢』編集委員／出原健一)

